

苦小牧民報

10月24日
月曜日

発行所 苦小牧民報社 〒053-8611 苦小牧市若草町3丁目1番8号 代表電話 0144(32)5311

月決め購読料(税込み)2,440円(1部120円)

苦小牧市 市民ホール テーマにフォーラム

公共施設の方向性探る

市長 「長期的視点で柔軟に」強調

苦小牧市は23日、建設を計画する「市民ホール(仮称)」をテーマにした市民フォーラムを苦小牧市民会館で開いた。市が市民ホールの方向性を市民へ発信する初の機会。文化施設の先進的な運営で知られる岐阜卓の可児市文化創造センターAria(アーラ)の衛紀生(えい・きせい)館長の講演や、岩倉博文市長と市民が意見交換するパネルディスカッションを通じ、来場者は市民ホールの在り方について考えを深めた。



市民ホールの在り方について、衛館長(右から4人目)を交えて岩倉市長や関係者が意見を交わした

市民ホールは、今年で築48年たつて老朽化した市民会館の建て替えて、周辺の公共施設と統合した複合施設を建設する構想。周辺の文化会館や労働福祉センターなどを候補にした施設の方向性について検討を進め、2015年度までに市民や有識者を交えた検討委員会の議論を経て基本構想を固めた。17年度には建設地や施設機能を含めた基本計画を完成させる予定だ。

約200人が来場した市民フォーラムはこれまでの議論の経過を発信し、来場者へのアンケートを通じて市民意見を把握することも狙っていた。

催。あいさつで岩倉市長は「こ

れからの時代、市民生活がどう変わるのかを十分に踏まえ、市民ホールを考えたい」と語り、長期的な視点や柔軟な発想で施設を建てる重要性を強調した。

講演で衛館長は、公共施設の役割について「税金で設置し、運営する公共施設は社会的責任が求められる。一部の愛好者や特権階級のための芸術文化、施設では駄目だ」と

指摘。コンサートや演劇などを催すだけでなく、芸術活動のワークショップなどを通じて貧困家庭や障害者、不登校児などを支援している可児市文化創造センター・アーラの実践例を紹介した。

続くパネリストは、市民ホールでは、岩倉市長、市民ホールワーキンググループの黒岩真美さんと山口勝次さん、衛館長がパネリストとなって意見交換。アーラの活動について「とても壮大なことを実現し、成功している」と知って驚いた。苦小牧でもできるのではないと思った」といった感想の他、「常識を超えた取り組みをどう創出したのか」「リピーターを増やす方法は何か」などと衛館長への質問も相次いだ。衛館長は「劇場は体温が感じられるべき施設だと思っているので、そこで働く人間のキャラクターが重要で、この資産こそが大切だ」とも助言した。

パネリストのやりとりを耳を傾けていた市内しらかは町の星雅博さん(67)は「施設機能や立地の話などは聞けなかったのは予想外だったが、公共施設の新しい考え方の話はすごく面白かった」と話していた。

地域貢献の施設に

苫小牧で市民ホールを考えるフォーラム

苫小牧市が複数の公共施設を統合して建設を予定する複合施設「市民ホール(仮称)」について、有識者を招いて討論した23日のフォーラムでは、新しい施設に求められる機能や考え方が示された。先進的な取り組みで注目を集める岐阜県可児市の複合施設「市文化創造センターa|a(アール)」の衛紀生館長の講演と、討論の内容を詳報する。(田鍋里奈)

岐阜県可児市の複合施設「市文化創造センターa|a」館長

衛紀生氏が講演



「人が集まる『人間の家』を目指すべきだ」。革新的な取り組みを紹介する衛館長

岐阜県可児市は人口10万人ほどの地方都市です。複合施設の市文化創造センターa|aの開館5年が経過した2007年、館長に就任しました。アールは芸術団体の公演以外に地域への貢献を重視しています。13年に国の特別支援劇場音楽堂にも選ばれるなど、地域に必要な劇場としてトップを走り続けています。アールの原点は、劇場から一番遠くにいる人に来てもらうこと。実現のために取り組むのが「まち元気づけプロジェクト」です。地元企業の寄付で貧困家庭などの家族を「コンサートに無料招待する」「あしながおじさんプロジェクト」や、不登校の子どもの向けの催し、障害者や小さな子ども連れ家族が楽しめる「コンサート」を開催しています。こうした取り組みは劇場の仕事ではないと思われませんが、芸術鑑賞と発表の場なら民間施設でも

税金で設置 社会的責任

目指すのは「人間の家」

可能です。税金で設置する劇場には社会的責任があります。市民にどう貢献するのか、市民と向き合う必要があります。常識に縛られていては新しい考えは浮かびません。アールでの公演は当口券を半額にするなど、さまざまな改革をしています。通常は当口券の方が高く、悪い席にあたることもありますが、ここでは観客側のメリットが大きい。食べられない芸術家が先に資金を稼ぐために作った慣行。常識になっている仕組みの実態はこんなものです。これからの公共劇場に必要なのは、地域に支持されることです。アールがあって良かったと感じるのは、芸術に触れた障害者の目が輝き、子どもたちがはしゃぐ瞬間を見る時です。「芸術の殿堂」では無く、人が集まることのできる「人間の家」を目指すべきでしょう。

出会いつくれる場 ■ 集客、特効薬なし



市民ホールの役割などについて意見交換した討論

市長ら討論要旨

森傑(市民ホール建設検討委員会委員長) 衛館長 岩倉博文(苫小牧市長) 新時代にあったホールの機能を示してもらった。苫小牧市が建設予定の市民ホールの基本構想では、市民にとって「第3の居場所」にするという概念が出されたが、それに通じる。 黒岩真美(市民ホール建設検討委員会作業部会メンバー) ホールは音楽を演奏していく仕事場所という認識だった。新ホールができたら音楽を通じて人との出会いをつくられると感じた。

山口勝次(市民ホール建設検討委員会作業部会メンバー)

文化芸術の得意分野は仲間づくりという話が印象に残った。18歳からダンスをしていて仲間が増えた経験があり共感した。 岩倉 苫小牧市の財政規模は一般会計800億円、全会計が合計1300億、1400億円。可児市は半分の財政規模だろうが、よく建設に踏み切れたと思う。 衛紀生(可児市文化創造センターa|a館長) 可児市は1980年代から建設基金をつくり、50億円積み立てた時点で建設に向けて動き出した。残りの約80億円は起債して賅った。 山口 集客に即効性がある事業を教えてください。 衛 特効薬はない。来た人が自分が歓迎されていると感じられるかが大切。職員には、知った顔を見たらあいさつするように言っている。来館者と会話し、地道に関係をつくるしかない。